海外研修　様式第２号

2026 年　4 月　8 日

武蔵野美術大学　学長　殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	大田暁雄	所属	視覚伝達デザイン学科
		職位	教授

研究課題	イタリアにおけるプロジェッタツィオーネの教育・実践現場の視察
研究先機関	Fattoria delle Ginestre（教育農場）、Laboratorio Zanzara（ラボラトリオ・ザンザーラ）、Studio Cavaglià（カヴァリア・スタジオ）、Casa di Quartiere Alessandria（アレッサンドリアの地区の家）、Edizione Carthusia（カルトゥージア出版）他
主な滞在地 （国・都市名）	イタリア（ミラノ、トリノ、アレッサンドリア他）
渡航日程	2026 年 3 月 21 日　～　2026 年 3 月 30 日（10 日間）
研究目的・理由	多木陽介氏主宰の「イタリア移動教室」に参加し、イタリアにおけるプロジェッタツィオーネ（非商業主義的なデザイン概念）の教育および実践現場を視察し、本学でのデザイン教育に活用しようと試みる。内容は、シルヴァーナ・スペラーティ氏の「教育農場」でのムナーリ・メソッドの WS 参加、ラボラトリオ・ザンザーラでの障害者とデザイナーとの協働視察、建築家ジャンフランコ・カヴァリア氏のスタジオでカヴァリア氏によるプロジェッタツィオーネについての講義受講、アレッサンドリアの「地区の家」における市民主体のホームレス・学童・薬物中毒者支援の実態視察、カルトゥージア出版での社会的絵本出版の視察など。
研究成果発表予定 （展覧会、著書、 論文発表等）	2026/5/6「二つ台みーとみーと」での報告会。 また、記録冊子の作成を検討している。

研究内容	今回の海外研修は、イタリアを拠点として批評・創作活動をされている多木陽介氏の「イタリア移動教室」というプログラムに参加するものである。これは、イタリアにおいて「デザイン」という言葉が資本主義的響きを伴って輸入される前から存在した「プロジェッタツィオーネ」的な活動を、現代において実践し続けている人々に会いに行くスモール・スクール・プログラムであり、多木氏が 2015 年より継続的に行っている。今回は、多木氏を 2025 年度に課外講座でお呼びした流れで、私と元ゼミ生を中心に企画をしていただいた形になる。他にも長崎雲仙での「プロジェッティスタ城谷耕生展」のインターン出身者や、横浜で地域活動をしている若者などが同行した。 【3/22】初日は夕方にミラノに集合し、移動教室参加メンバーで顔合わせを行った。 【3/23】朝からトリノに移動し、知的障がいのある人たちとデザイナーとが良いところを出し合って共に創造的活動を行う NPO 福祉法人「ラボラトリオ・ザンザーラ」を訪問した。主宰のジャンルカ・カンニッツォさんによれば、「ザンザーラ」とは「蚊」の意味で、社会から疎ましく思われがちな障害者という存在を逆手に取り、「もっとうるさく活動してやろう」という意図でつけられた名前だと言う。「ラボラトリオ」という名前も、「作業所」という単純作業を想起させそうな名前を避けた結果であり、障がいのある人々への敬意に満ちた施設である。実際、ここには張り子や T シャツ、トートバッグなど、施設利用者の文字や絵があしらわれたグッズがたくさん並んでいるが、一言も「障害者の作品」とは書かれていない。訪問者には単に良い物として買ってもらいたい、というジャンルカ氏の思い通り、素晴らしい作品ばかりだった。 午後には建築家でアキッレ・カスティリオーニ氏ともよく共同作業をしていたジャンフランコ・カヴァリア氏のスタジオを訪れ、プロジェッタツィオーネについての講義を受けた。イタリアでは建築家が新築の建物を作るような案件はほとんどなく、インテリア・デザインやリノベーションが建築家の主な仕事だと言うが、カヴァリア氏のスタジオは既存の建築の持つ良さを全く壊さないままに、その能力を最大限に発揮するようにデザインされ直しており、一見何もしていないように見せながら、その実、隅々まで配慮が行き届いていることが、徐々に伝わってきた。また、カヴァリア氏からは私自身の地図に関する活動についても激励を与えてくれ、次の一歩のはずみがついた心持ちである。 【3/24】次にアレッサンドリアでは「地区の家」という福祉施設を切り盛りしているファビオ・スカルトゥリッティ氏を訪ねた。ファビオ氏は「生涯で私有したのはベッド 3 つだけ」ということで知られる伝説的な福祉活動家ドン・ガッロ神父の組織に属しており、この「地区の家」もガッロ神父の信条を受け継ぎ、国籍や宗派の分け隔てなく困っている人々に場所を与えるような施設になっている。寄付された衣服を販売する施設（無料ではなくあえて値をつけることで利用者の心理的抵抗感をなくす）、元囚人や知的障害のある人が働くオーガニックのレストラン、商店街を活性化する活動をしているスローファッションのお店、「BEE MY JOB」プロジェクトで有名な移民・難民の支援施設 CAMBALACHE など、地域のさまざまな施設と連携してこの「地区の家」は機能している。何しろ、ファビオ氏が街を歩くと、いろんな人が声をかけてくる。つい先日までホームレスをしていたところをファビオ氏が仕事を斡旋したことにより、今は工事現場で働いて市民社会に同化できている男性や、人身売買で娼婦にされたところをファビオ氏らが救助して社会復帰した女性もいた。街の隅々まで気を配っているファビオ氏の凄さがわかる体験だった。 また、夕方には麻薬常習者のための活動をしているフェデリコ氏にも話を聞いた。麻薬常習者に「麻薬をやめろ」と言ったらそこでコミュニケーションが断絶し、多くはそのまま死んでしまう。だから麻薬の正しい使用法を教え、自己判断で麻薬の濫用をやめてもらう方法をとっていると言う（彼らの場所は「ドロップ・アウト」ならぬ「ドロップ・イン」という名前である）。麻薬に対してほとんど完全にタブー化し、情報を出さない手段をとっている日本の住人からするとにわかにはリアリティが湧かないのだが、まずは人間としてリスペクトし、話を聞き続けることから改善策を見つけ出そうという彼らの姿勢が非常に素晴らしいと思った。

研究内容	【3/25-26】モンテベッラ・デッラ・バッタリアでは、2 日間にわたってムナーリ・メソッドの WS に参加した。イタリアのプロジェッティスタの代表格で児童教育にも精を出したブルーノ・ムナーリに後押しをされ、片田舎の元農場で造形教育活動を続けるシルヴァーナ・スペラーティ氏に授業を受けた。まずは見渡すかぎりのブドウ畑に囲まれた丘陵地隊にポツンと立つこの農場が、来るもの全ての心を開かせるような環境となっており、同行した参加者たちは芝生に寝転んだり日光を全身で受け止めたりと、思い思いの格好で自然の恵みを享受しはじめる。そしていつしか自らの日頃の悩みを吐露するようになり、WS を始める頃にはすでに心を開いて他者と自分自身を受け入れる体勢が整っていた。 初日の課題は「農場の外を歩いて紙袋に何かを集めてきなさい」というもので、各々が成り行き次第で集めた自然物を客観・主観双方の言葉で記述し、それを「展示」としてプレゼンテーションせよというものであった。造形操作の面で見ればこれは言語化を介した自然物の分類・分節のトレーニングであり、形態論的視点へのイニシエーションであり、またファンタジアの訓練でもあるが、それ以上にこの WS で驚かされたのは、このプロセスが一種の自己分析と自己受容の過程にもなるという点である。なぜ自分はその物を集めたのか。その物のどんな点に惹かれたのか。対象が自分の頭の中で別の物と結びつく時に、結びつきの根拠となる経験はなんだったのか。そして、集めて分類してアノテートする操作そのものに顕れる自己の特性はなんなのか。そういった心理的な自己考察が常に伴うのである。さらに、こうした特性は複数人の作業を同時に並べることによって、はっきりと強調されてくる。ムナーリ・メソッドというものの本質は、完成した物それ自体ではなく、参加者の心の変化のうちにあるということがよくわかった。 2 日目の課題は「宿から農場までの道を歩き、草を集めてくること」で、農場に着く頃には各自の手の中にある草束にはすでに想像以上の差がついていたが、それを収集する過程ですでに、我々の目は植物学者のように草花の形態の分析をはじめており、いつの間にか名もなき雑草への分解能力が高まっていたことに気付かされた。その後、配られたさまざまな形の絵筆の特性を活かしながら「草むらを描く」ことを課された我々は、植物そのものの分析によって得られた形態のバリエーションと、さらに絵筆の使い方の工夫との相互関係によって、各々独自の「草むら」を描くことができるようになっていた。 資本主義社会にいると「造形が上手くなること」ばかりを求めてしまう。その中で自然を見つめ、自身を見つめ、自分にしかありえないような造形を生み出そうとするムナーリの教育思想は、大いなる癒し、肯定感を与える。私の所属する学科の基礎課程でも類似したことはやっているが、学生自身の特性を解放し、それを高度な造形操作にまで接続していくことが今後の課題かと思う。 【3/27】ミラノに戻ったわれわれはもう一人のプロジェッティスタである故アキッレ・カスティリオーニ氏の事務所を訪ねた。氏は名もなき道具やおもちゃの類を集め、いつもそれがどうしてそういう形になったのか、なぜ存在しているのかを分析していたという。事務所は現在、カスティリオーニ財団として展示活動を行なっており、彼自身の作品もさることながら、そうした物のコレクションを見ることができる。既にある物から別の物を作り出す彼の創造力の秘密に触れることができたと思う。 その日の午後はミラノの絵本出版社カルトゥージアを訪ねた。ここは文字を一切用いないサイレント絵本の出版で知られ、数々の作品を世に送り出している。パトリツィア・ゼルビ社長によれば、数年前に始めたサイレント絵本の国際コンクールでは、大人と子供の 2 つの審査員グループを作り、双方から選ばれた入選作を出版する方式を取っている。結果として、どちらも意外なものが選ばれることが多いが、今までの作品は全て重版が続いていると言う。他にも、絵本を作る際に絵本作家が単独で制作にあたることは稀で、まず「フォーカス・グループ」と呼ばれる学際的なチームを作って時間をかけてリサーチをすることから始めると言う。プロジェクトによってどのような職種を入れるかは異なるが、病院、保育園などで念入りな取材を行い、「作るべき本」を見定めた上で最後にイラストレーターが入ることが多い。日本の商業的な絵本出版の実態と比べると、非常に大らかで創造的なプロセスであるように思える。

研究内容	【3/28】最終日は日帰りでボローニャに赴き、アントネッラ・アンニョリ氏のご自宅と彼女がディレクターを務めたサラ・ボルサ図書館を取材した。アントネッラ氏は図書館の実務的なプロであると同時に、図書館思想家のような側面を持っており、図書館を公共の場所としてどんどん変化させていこうという進歩的な考えの持ち主であった。まず、現代の図書館に人が来ないことを嘆くのであれば、人が来たくなるような場所に変えなければならないと考え、通常はネガティヴなものとして捉えられる要素を積極的に取り入れていった。例えば、サラ・ボルサ図書館では託児所やバール（カフェテリア）、イベントスペースが設置され、地下には利用者が音楽を収録できるようなブースなど、さまざまなスタジオ機能も備えた。図書館とは市民が集まって何か自分のための創造的行為をする場所であり、そのために必要な要素を足していくのである。当然、静かに本を読みたい人もいるから空間をうまく使って静けさのレベルごとにゾーニングしている。元証券取引所で中空のある建物は図書館として使いやすくはないだろうが、非常に多くの利用者がいたのが印象的である。また、手続きをせずとも気軽に人が入れるように（サラ・ボルサ図書館はボローニャの中心的な広場に面している）カウンターを一番奥に設けたり、人々が仕事の後に訪れやすいよう開館時間を長くしたりと、街のパブリック・スペースとなるよう工夫を凝らしている。「図書館は、時代のニーズに合わせて変わらなければならない」「市民の需要に合わせた機能を考えるのが最優先で、建築は最後」と述べるアントネッラ氏の進歩的な図書館思想は、さながらオーストリアの博物館運動家オットー・ノイラートの話を聞いているようであった（聞けば、アントネッラ氏も若い頃は共産党のキャンペーンに随伴し、ドキュメンタリ―映画を作って街の広場で上映するなど、左翼的な側面が強いらしい）。「私は多分本より人が好き」という言葉が印象的であった。

大学授業における 研究成果の還元	すぐに大学教育に生かせるわけではないと思うが、デザイン教育をもう少し生に根ざしたものとして再考する上で、今回の研修は非常に有益なものであった。学部の基礎課程から、3 年次の社会デザイン教育、卒業制作、大学院教育までに関連する内容であったし、今回の移動教室の主宰である多木氏を含めた何人かの方々とは今後何らかの形で大学に関わってほしいとも考えている。現在のところ、ブルーノ・ムナーリの教育論について研究会を立ち上げ、展示等で発表の機会を作りたいと考えている。大学が真にクリエイティヴな場所であり、人間的な場所であるために、我々は常に教育の刷新を行うべきであり、そのためには教員も高みにいるのではなく、大学の外の生活から学び続けなければならないと確認させられる研修であった。 また、今回の移動教室プログラムには卒業生も参加しており、彼らが将来本当の意味で社会的な活動をしていってくれることを期待している。

研究日程（全滞在期間）

出発日 （現地時間）	出発地 （国・都市名）	到着日 （現地時間）	到着地 （国・都市名）	研究内容等	滞在 日数
3/21	東京	3/22	ミラノ	ブレラ絵画館、『最後の晩餐』美術館	1
3/23	ミラノ	3/23	トリノ	ラボラトリオ・ザンザーラでの知的障害者とデザイナーとの協働の視察。 建築家ジャンフランコ・カヴァリア氏のスタジオでカヴァリア氏によるプロジェッタツィオーネについての講義受講	1
3/24	トリノ	3/24	アレッサンドリア	アレッサンドリアの「地区の家」における市民主体のホームレス・学童・薬物中毒者支援の実態視察	1
3/25	アレッサンドリア	3/25	モンテベッラ・デッラ・バッタリア	シルヴァーナ・スペラーティ氏の「教育農場」でのムナーリ・メソッドの WS 参加（2 日間）	1
3/26	モンテベッラ・デッラ・バッタリア	3/26	ミラノ		2
		3/27	（ミラノ）	レアーレ宮殿での形而上絵画展の視察。 アキッレ・カスティリオーニ財団の視察。 カルトゥージア出版での社会的絵本出版の視察	
3/28	ミラノ	3/28	ボローニャ	アントネッラ・アンニョリ氏への取材。サラ・ボルサ図書館視察。	
3/28	ボローニャ	3/28	ミラノ		1
3/29	ミラノ	3/30	東京		
備考					

以上

※　欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。
※　その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。

ラボラトリオ・ザンザーラ（トリノ）のクラフト・ショップ

ジャンフランコ・カヴァリア氏のスタジオ（トリノ）

アレッサンドリアの「地区の家」

「地区の家」での麻薬常習者の支援についての講義

シルヴァーナ・スペラーティ氏の「教育農場」（モンテベッラ・デッラ・バッタリア）

ムナーリ・メソッドのワークショップ

アキッレ・カスティリオーニ財団（ミラノ）

カルトゥージア出版とパトリツィア・ゼルビ社長（ミラノ）

サラ・ボルサ図書館（ボローニャ）